

及御照會候也」(『往復書類』明治十七年下)という照會文が寄せられ、閉会後は博覧会事務局より全出品物がメーソンの仲介で、ボストン音楽院と楽器交換の手はずが整えられた。その後ボストンではこれらの物品にどのような興味を示したか記録は残っていない。

この博覧会に關して日本の出品物に対する一般人の興味的一端をのぞかせる一通の手紙が文書綴に保存されている。明治十八年(一八八五)六月十三日サンフランシスコ発信、発信人名は明らかではないが、おそらく博覧会の関係者であろうか。内容は、ニューヨーク・トリビューン紙が、ニューオーリンズの博覧会を通して取調掛の成績状況を紹介したところ、その反響で次の四名が英文申報書を欲しがっており、送付するようにとの依頼文である。

Miss M. P. Mason, Care P. O. Box 218, Montclair, New Jersey.
H. C. Andrews, No. 2 Wall St. Room 64, New York City.
Edward S. Clinch, No. 115 Broad Way, New York City.
F. A. Christie, Johns Hopkins University, Baltimore, Md.

外国人にとつても日本という特殊な事情のもとで、このような短期間に難事業を成し遂げたその偉業は賞賛に価するものであったろう(『諸向往復書類』明治十八年、手書き)。

(三) イギリス、ロンドン発明品博覧会への参加

明治十八年(一八八五)の秋、ロンドンで開催する「英国発明品博覧会」に音楽取調掛は東京大学、東京師範学校、東京女子師範学校とともに参加することとなり、同年三月末に決裁のおりた、次のような物品を出品することになった。

第二部

第三十二區

第百七十五類

音楽取調所調整

番號	物名	數	發明改良者名	製造人	原價 円錢厘
第一號	雅樂用笙	一管			三〇〇〇
第二號	同 龍笛	一管			二〇〇〇
第三號	同 高麗笛	一管			八〇〇〇
第四號	同 神樂笛	一管			八〇〇〇
第五號	同 同	一管			六〇〇〇
第六號	同 同	一個			四〇〇〇
第七號	同 同	一個			五〇〇〇
第八號	同 同	一個			三〇〇〇
第九號	同 同	一個			三〇〇〇
第十號	同 同	一個			三〇〇〇
第十一號	同 同	一個			三〇〇〇
第十二號	同 同	一個			三〇〇〇
第十三號	同 同	一個			三〇〇〇
第十四號	同 同	一個			三〇〇〇
第十五號	同 同	一個			三〇〇〇
第十六號	同 同	一個			三〇〇〇
第十七號	同 同	一個			三〇〇〇
第十八號	同 同	一個			三〇〇〇
第十九號	同 同	一個			三〇〇〇
第二十號	同 同	一個			三〇〇〇
第二十一號	同 同	一個			三〇〇〇
第二十二號	同 同	一個			三〇〇〇
第二十三號	同 同	一個			三〇〇〇
第二十四號	同 同	一個			三〇〇〇
第二十五號	同 同	一個			三〇〇〇
第二十六號	同 同	一個			三〇〇〇
第二十七號	同 同	一個			三〇〇〇
第二十八號	同 同	一個			三〇〇〇
第二十九號	同 同	一個			三〇〇〇
第三十號	同 同	一個			三〇〇〇
第三十一號	同 同	一個			三〇〇〇
第三十二號	同 同	一個			三〇〇〇
第三十三號	同 同	一個			三〇〇〇
第三十四號	同 同	一個			三〇〇〇
第三十五號	同 同	一個			三〇〇〇
第三十六號	同 同	一個			三〇〇〇
第三十七號	同 同	一個			三〇〇〇
第三十八號	同 同	一個			三〇〇〇
第三十九號	同 同	一個			三〇〇〇
第四十號	同 同	一個			三〇〇〇
第四十一號	同 同	一個			三〇〇〇
第四十二號	同 同	一個			三〇〇〇
第四十三號	同 同	一個			三〇〇〇
第四十四號	同 同	一個			三〇〇〇
第四十五號	同 同	一個			三〇〇〇
第四十六號	同 同	一個			三〇〇〇
第四十七號	同 同	一個			三〇〇〇
第四十八號	同 同	一個			三〇〇〇
第四十九號	同 同	一個			三〇〇〇
第五十號	同 同	一個			三〇〇〇

第三十二區

第百七十六類

第一號	第二號	第三號	第四號	第五號
雅樂琵琶平調ノ調子ヲ示スヘキ調音又	俗箏平調子ヲ示スヘキ調音又	日本音樂十二律ヲ示スヘキ調音又	俗曲音調ノ基本ヲ示スヘキ調音又	日本音樂律管
四個	八個	三個	一個	三個
文部省御用掛 芝葛鎮調定	同 山勢松韻調定	同 芝葛鎮調定	同	雅樂師 辻高節調定
富岡 米藏	同 人	同 人	同 人	辻高節 重助
一八三〇〇	一七六〇〇	一七六〇〇	三五〇〇	一三〇〇〇

第六號	俗箏並ニ雅樂琵琶 雅樂箏等各種ノ調 子ヲ定メ各種ノ音 階ヲ示スヘキ調音 琴	一個	音樂取調所長 伊澤修二改良	才田伊三郎	九二五〇
附一	琵琶各種調定尺度	六枚	同人測定	柳下藤五郎	七三〇〇
二	箏(雅樂)各種調 定尺度	三枚	同上	同人	三八〇〇
三	和琴各種調定尺度	四枚	同上	同人	五二四〇
四	箏(俗樂)各種調 定尺度	五枚	同上	同人	六四四〇
第七號	小律管	一個	雅樂手 林廣海調定	林田重助	五〇〇〇
第八號	諸樂器ノ調子ヲ示 スヘキ掛圖	二軸	文部省御用掛 内田彌一外數 名編製		一七〇〇

第三十二區
第百七十七類

第一號	盲人教授用樂譜表	一個	音樂取調所長 伊澤修二發明	才田伊三郎	二九〇〇
附一	音符	五百個	同上	同人	二六八〇〇

第三十二區
第百七十八類

第一號	雅俗樂譜	一冊	音樂取調所編		一〇〇〇
第二號	唱歌集	三冊	同上		三九九

附録

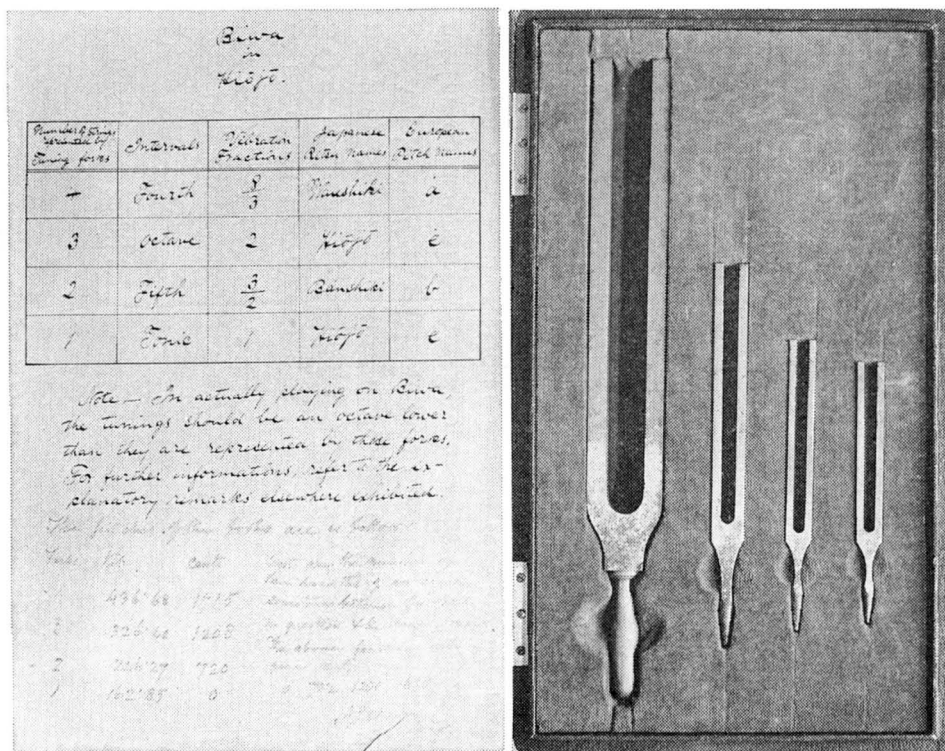
一、音樂取調所長ノ音樂取調成績拔萃英文申報書 二十冊 三六〇
以上 [手書き]

(『本省各局往復書類』明治十六年七月~十八年五月)

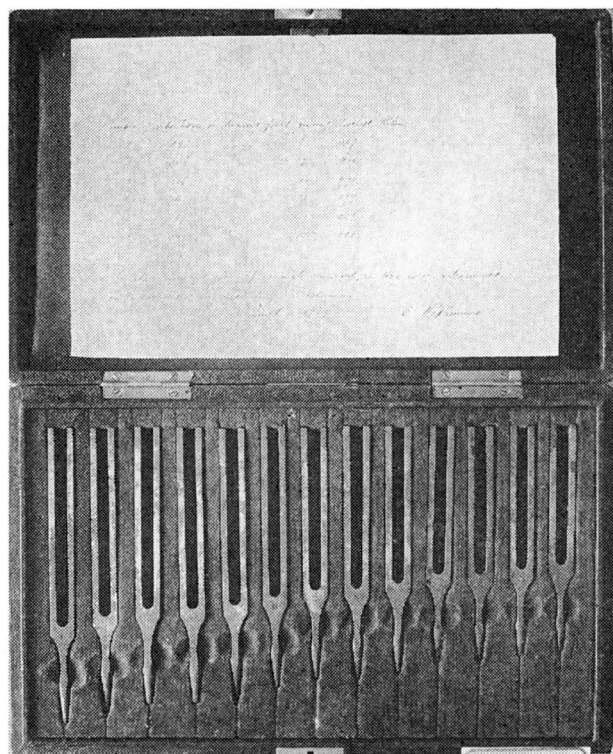
この博覧会では音樂取調掛の出品物に対して金賞牌および賞状が贈られた。

(1) 音樂取調掛は明治十八年二月に音樂取調所と改称されたが、同年十二月、再び元の取調掛にもどった。

これらの出品物は博覧会閉会后、民族音樂研究で世界的に高名なアレキサンダー・エリス(一八一四~一八九〇)に依頼して、調音又類を除きサウスケンジントン・ミュージアムに寄贈されることになった。一方、博覧会への出品物を取調掛から英国へ発送するとき「Presented to Alex. J. Ellis」と表記した荷がともに荷積みされた。これはエリスの要請によって博覧会に出品する取調掛調製の俗箏平調子調音又と同一のものを、別個に彼に贈呈されたものであった。後日エリスから届いた伊澤修二あての手紙によると、九月末に博覧会事務官渡瀬寅二郎氏を通してこれを受け取ったようである。書簡は明治十八年(一八八五)十月十一日と二十四日付の二通が文書綴に保管され、それには音又保管上のていねいな注意とその偉大な仕事に自分が援助できるなら喜んで協力したいと述べてあり、音樂取調掛調製の音又は今までに知っているものとは全く異なっており、その特徴と日本における音又調製の事情を「Journal of the Society of Arts」の今月号(一八八五年十月号)に紹介したことが記されている。エリスは大学では法律を専攻したがのちに音声学と音樂音響学に転じ、著書『和音の物理的構造とその関係 On the Physical Constitutions and Relations of Musical Chord』(一八六四)、『固定音をもつ樂器の調律について On the Temperament of Instruments with Fixed Tones』(一八六四)、『聲樂家のための發音 Pronunciation for Singers』(一八七七)、『言葉と歌 Speech in Song』(一八七八)ほか注目すべき重要な研究を発表し、さらにヘルムホルツの『音感覺論』、プレイヤーの『聴覚の限界について』の英訳でこの分野に大きな功績を残した。また諸民族の樂器研究によって『諸民族の音階』を著し、民族音樂学研究の基礎を開いた。特に、この研究から音階、音程の研究を進め、音程の単位セントを考案してイギリス政府から銀賞を得たことは有



音楽取調掛考案製作音叉(1) 琵琶楽(平調)の音叉とその説明書(5つの欄は左から音叉の番号、音程、振動比、日本律名、西洋音名)。東京芸術大学附属芸術資料館保存



音楽取調掛考案製作音叉(2) 日本音名の十二律を示すための音叉。東京芸術大学附属芸術資料館保存

名である。したがって日本の伝統楽器についても見識が高く、このエリスの媒介で英国に保存されることとなったこれらの楽器は、その後の民族音楽研究に大いに寄与したことであらう。

エリスの書簡全文

Dear Mr. Isawa

11 Oct '85

The French forks were exactly turned a fortnight ago, but I wished to give them into the hands of Mr. Watase, & he could not meet me at the Exhibition till last Monday 5 Oct. when an unfortunate could prevented me from meeting him & still prevents me from making appointment.

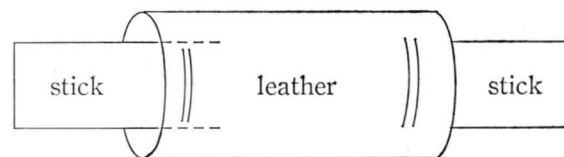
With the forks I have put up a bottle with the proper oil for occasional oiling. Rub in with the finger & clean off with washleather. Don't let the oil clog on the forks. Be very careful to prevent rust. Use very little oil.

I hope you will be pleased with the forks and that they may be of assistance to you at the Institute. They may prove serviceable for tuning your pianos by. You will find all the Fourths & Fifths very correct.

I have written an account of your forks for the 'Journal of the Society of Arts' which I will send you when printed, probably at the end of this month. It will also contain an account of the Siamese musical scale, which is quite different from anything I have yet met with.

For striking the forks I usually employ a piece of stick bound round with several folds of soft wash leather. I hold this in one hand & strike the fork against it with the other.

When I am working at tuning I use a lump of lead



covered with leather, which enables me to strike two forks at once easily to compare them, but of course produces a tinkle at first, but it soon goes off & must be disregarded.

I will keep this letter open till I have given the forks into the hands of Mr. Watase.

24 Oct. 1885

I have at length been able to meet Mr. Watase & I have given the box of forks into his care as also the little box containing the small bottle of gun-lock oil.

Mr. Watase mentioned that you had been good enough to refer to me in a speech you had made lately at the graduation of musical students. I am glad if you think that I have been of any service to you in the great work you are doing for Japanese music.

The paper upon your forks &c. is already in type & Mr. Watase says that he has sent you the proof of what relates to Japan. It may be some weeks yet before I get copies but I will not fail to send several to you.

With best wishes for your success in the efforts you are making to promote the improvement of Japanese music.

I remain

Truly yours

to Mr. Sh. Isawa
Institute of Music
Tokio Japan

Alex. J. Ellis

[手書き]

〔諸向往復書類〕明治十八年

伊澤修二はこのような海外の博覧会に参加できたことに対し「音楽取調上ニ於テ望ヲ将来ニ属スベキ一新途ヲ開キタルモノト云ベシ」と述べている〔音監開申書類〕明治十七年。

博覧会への出品は、このうち東京音楽学校になってからも二度行っている。一度目は明治二十二年五月開催のフランス・パリ万国博覧会、二度目は二十六年五月開催のシカゴ・コロンブス世界博覧会で、いずれも明治十八年秋のロンドン発明品博覧会と同様の物が出品されている。

なお、シカゴの博覧会閉場後（九月二十九日）同会の事務官は各国役員を招待して晩餐会を開き、その際日本人による〈君が代〉〈紀元節〉〈六段〉および各国の音楽演奏を披露し、招待者の賛辞を得たということである〔博覧會關係書類〕明治二十二年、二十六年。

九 音楽取調掛の演奏会

（一）「明治十四年七月七日音楽取調掛期末試業略記」

ここで歌われている唱歌はすべて『小學唱歌集初編』に含まれているもので、この試験が実施された当時、唱歌集作成の仕事は選曲を終え、最終的な完成に至る段階にあった。いわば期末試験演奏の場をかりて、でき上がった歌を歌わせ、その適否を検討する目的もあつたのであろうか。

唱歌ノ部

樂器ヲ用キズシテ唱フ分

第一図第一曲 カヲレ

第二曲 ハルヤマ

下第三図第七曲 ハルハハナミ

上第二図第六曲 ワカノウラ

第四図第十曲 ハルカゼ

第五図第十一曲 ハルミニユキマセ

洋琴ヲ用キテ唱フ分

第十図第十七曲 蝶々

第十二図第十九曲 閨の板戸

風琴ヲ用キテ唱フ分

第十四図第廿二曲 眠レヨ子

第十五図第廿三曲 君が代〔現行の〈君が代〉とは別のもの〕

号外第二曲 玉ノ宮居

第三曲 隅田河原

第四曲 大和撫子

琴及胡及ヲ用キテ唱フ分

第六図第十三曲 見渡セバ

第八図第十五曲 春の弥生

第十三図第二十曲 螢〔螢の光〕のこと

ヴァイオリン、テナ、ヴィオレンセロ、横笛、クラリオネット、琴

ヲ用キテ唱フ分

第十四図第二十一曲 若紫

第十六図第廿四曲 思ヒ出レバ

ヴァイオリン、テナ、ヴィオレンセロ、横笛、クラリオネットヲ用